ウシオ電機株式会社　2023 年（令和５年）3月期 第３四半期 決算説明会
主な質問と回答

日 時： 2023 年 2 月 3 日（金）17：00 ～ 17:45
方式： オンライン
説明者：取締役 常務執行役員 CFO 経営統括本部長　　朝日 崇文

＜ご留意事項＞ 「主な質問と回答」は、決算説明会に出席されなかった方々のために、参考として掲載しています。掲載する内容は、当社の判断で簡潔にまとめたものであることをご了承ください。 また、本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があることをご了承ください。

◆ **質問者：大和証券株式会社 杉浦様**

Q：第４四半期の光源事業の下方修正についてお伺いしたく。どういった製品がこのマイナスをもたらしているのでしょうか。またこういった今の第４四半期のような環境がいつまで続くのでしょうか。半導体や FPD に関しては来下期からの回復ということでご説明いただいたが、それ以外の光源については、どのような見通しでしょうか。

A：第４四半期に落ちている主な品種は、UV ランプ及びシネマ用ランプの二つで大きな影響が出ています。UV ランプについては、市況が軟化している状況の中で稼働が第３四半期辺りから落ちてきて、稼働が活況だった頃の流通在庫が膨らんでおり、第４四半期はその調整も入って大きく落ちている状況です。シネマランプについても同様な状況にあり、これらの調整が第４四半期に入ることから、第４四半期の利益に影響が出ている状況です。
UV ランプについては、調整自体は第４四半期で一度落ち着くとみていますが、半導体市況の低調な状況は来上期いっぱい、続くのではないかと見通しています。引き続き精査を続けていきます。
シネマに関しましては、市場自体はコロナからの回復傾向が続き、流通在庫の調整が今四半期で一服した後は、ある程度戻ってくると見ています。

Q：来年度から新しい中期経営計画が始まるということで、今の時点でどういったお考えを持っているのかをお伺いできますでしょうか。事業面では、これまで光学装置事業中心に注力されてきて、来年度からさらに伸びると思うが、それ以外の光源事業や映像装置事業も含め、来期の中計に向けて御社の今の考えを可能な範囲でお伺いしたく。併せて、株主還元についても、現状、来期以降に向けてどういった考えを持っているのでしょうか。

A：中計については、現在策定中で具体的には申し上げられませんが、事業面は、半導体等に関連する装置やランプは、継続的に需要が伸びていくとみており、引き続き積極的な取り組みを進めていく考えです。また、映像装置に関しては新型コロナ影響からの回復や、装置の更新需要が次期中計の期間に出てくると見込んでいるので、競争力を強化しつつ、その需要を追求していくという方向性になると思います。株主還元については将来に向けた積極的な投資と株主還元のバランスを検討していく方向です。いずれも次期中期経営計画の中で改めて説明いたします。

◆　**質問者：マッコーリーキャピタル証券会社　湯（トン）様**

Q：第３四半期、第４四半期の映像装置事業で部材コスト上昇の影響が大きく出ているようだが、売価への転換状況はどうでしょうか。また、部材調達課題などはほぼピークアウトするのではないかと思っているが、マイナス成長はいつまで続く見通しでしょうか。そして来期のこの映像装置の収益性をどういう方法で改善していくのでしょうか。

A：部材コストが上がっている中で、売価への転換等も進めていますが、現在、部材で一部不足しているものがあり、これが来期においても継続すると考えています。

　来期の映像事業の売上高は今期より回復していくことを見込んでいるものの、来上期くらいまでは部材不足が継続する見込みで、大きな回復とまではいかないと思います。ただし、今期と比較すると、それなりの利益改善が達成できるのではないかと考え、取り組みを進めているところです。具体的には、部材コストが上がる中で、標準化等を通じたコスト削減をおこなう、売価の適正化を進める、そしてサプライチェーンマネジメントの改革で売上を押し上げるということを進めていくことで、収益の改善を図っていきたいと考えています。

Q：光学装置事業の最先端 IC パッケージ用露光装置の中長期での成長ストーリーは変わっていないという話だが、短期的なリスクは感じたと認識しています。来期の上下のバランスをどのようにみていますか。

A：来期の上・下バランスについては、一部上期から下期にずれていくものが想定され、下期に向けて尻上がりの売上になっていくと見ています。

◆　**質問者：株式会社東海東京調査センター　石野様**

Q：16 ページの有望製品の３つ（最先端 IC パッケージ基板向け投影露光装置、ダイレクトイメージング露光装置、EUV リソグラフィマスク検査用 EUV 光源）について、来期以降の動向を教えてほしい。

A：最先端 IC パッケージ基板向け投影露光装置に関しては、長期的には需要が強く、引き合いも旺盛ですが、2023 年度は投資計画のずれなどの影響でそこまで伸びない可能性があり、現在精査しているところです。ダイレクトイメージング露光装置についても、今第４四半期に検収が集中したことから好調な売上が見込める一方で、全体としては、半導体及びスマホ等々の最終製品の踊り場の影響を受けて、2023 年度は一服感があると考えています。ただし中長期的には伸びていくマーケットだとみています。EUV に関しては、市況における調整局面、かつコストに関して非常に厳しい状況が想定されている中で、本体の売上は来年度も調整局面が継続する見込みです。一方でサービス、保守メンテナンスに関しては、現在もそうですが、好調に推移しています。稼働が上がっている状況は変わらないので下支えとなると見ています。

Q：貸借対照表について、第２四半期から第３四半期にかけて QonQ で現預金がかなり大きく減っている一方で、在庫が一定度増えているが、この現預金の減り方と在庫の増え方をどのように認識すればよいでしょうか。

A：棚卸資産の増加に関しては、一つは映像装置関連で部材が足りないものと、部材の長期化から先行購入したもの等々があり、仕掛品や最終在庫が増えています。第４四半期以降の販売において、減少をさせるように取り組んでいます。

二つ目に、光学装置の需要が増えておりますが、光学装置は手番が長い商品のため、増加影響があります。これについ

ても、検収の早期化等に取り組みながら圧縮をしつつ、売上計上に向けた最適な在庫規模を追求していく必要があると認識しており、その辺の強化を進めていきたいと考えています。

◆ **質問者：Bank of America 証券会社　岩井様**

Q：光学装置の今期の業績予想の引き上げについて、保守メンテナンス機会の増加とコストの抑制を挙げていただいたが、要因としてはどちらが大きかったのか。また、保守メンテナンスの収益が増えているのは、具体的にどの製品に関するものでしょうか。

A：要因の割合としては、保守メンテナンスの増加が大きいです。主な対象製品としては最先端 IC パッケージ向けの露光装置の稼動が顕著であることから、その稼働に関連する保守サービス及び EUV の保守サービスメンテナンスとなります。

Q：光学装置事業の来期の見通しに関して先ほどの質問の回答の中で、最先端 IC パッケージ基板向け露光装置は、来年度はそれほど伸びないというリスクも危惧されており、ダイレクトイメージング露光装置についても一服感はあるかもしれない。EUV 光源についても、来年度はあまり振るわないのではないかということで、全体としてあまり売上高は増えない、むしろキュア装置などは減っていくので、売上が減収になるのではとも思われます。一方で、最先端 IC パッケージ基板向け露光装置については、能力を拡張しているので固定費が上がってくる部分もあると思いますが、全体としていろいろな要素をひっくるめたときに、来期光学装置事業の売上と利益はどう見えてくると考えておけばいいでしょうか。

Ａ：現在、精査をしていますが、中長期の需要成長は見込まれるものの来期においては踊り場で、売上はおそらくそれほど伸びないのではないかという感触を持っています。利益に関しては、保守サービスの底上げで、一定確保はできるのではないかと見ていますが、具体的には現在精査中ですので、改めて説明させていただければと思います。

◆ **質問者：三菱 UFJ モルガン・スタンレー証券会社　和田木様**

Q：EUV 光源に関してリスクが示されたが、事業の縮小などの可能性も否定できないような状況なのか。

A：EUV に関しては、長期的には非常に強く、ウシオの大切かつ技術競争力のある事業のため、全力で取り組んでいくという状況に変わりはありません。現在、コスト競争力、技術的な優位性、それからマーケティングアプローチなど、全方位で戦略強化を検討しているところです。

Q：今、業界で 8.7G の OLED や、海外メーカーでは micro LED・mini LED が盛り上がっているようだが、御社の事業機会についてご説明いただけないでしょうか。

A：OLED に関しては、キュアリングなどで事業機会がある可能性があります。micro LED や mini LED においては、映像装置事業で今後の事業機会に向けて取り組んでいる一つであります。

◆　**質問者：株式会社東海東京調査センター　石野様**

Q：UV ランプ等を使う半導体メーカーは、当初半導体が非常に活況だったときに、ランプを先行発注し、ここに来て稼働率が急速に低下している環境があり、先ほどの流通在庫による下方修正の話をしていたと思うが、この動きがいつ頃から起こり、先行手当した部分がどれくらいのボリューム感があったのでしょうか。これから回復することを考えると、その辺のイメージ感があると大変助かります。

A：イメージとしては、おそらく第 2 、3 四半期から始まっており、現状、大体 1.5 カ月から 2 カ月程度流通側のだぶつきがあって、解消するには 3 か月程度かかると想定しています。

以上